

## はしがき

札幌医学雑誌の特別号として令和元年度の最終講義の内容を掲載することができ、学長として安堵しています。本年度の最終講義は去る3月6日に行う予定でしたが、ご存知のようにCOVID-19感染症のため中止をせざるを得ませんでした。本年度で定年退職される3人の教授の先生方、高橋弘毅教授（医学部）、宮本 篤教授（医学部）、高田 純教授（医療人育成センター）には大変申し訳なく思っていました。そのため、例年行っていた最終講義に代わるもので、しかもその後も形として残るものはないかと大学内で検討し、今回発行する札幌医学雑誌の特別号として3人の先生の最終講義の内容を掲載することにいたしました。

これには、この雑誌の編集委員会（委員長：三高俊広教授）の各先生方の御支援をいただきました。そのご高配に改めて感謝申し上げます。なお、来年度からは、これも編集委員会の承認をえて、最終講義の内容をこの雑誌に「最終講義」として掲載することにしています。定年退職される教授の先生の本学での足跡を残すという、大学として重要な役目を果たすことができるのではないかと考えています。

今回の3先生のこれまでの教育研究に係る業績に関しては、この特別号を御一読いただければ、そのごく一端かもしれませんが御理解いただけたと思います。それ以外のことで少し書かせていただきます。

高橋教授は、副医学部長、アドミッションセンター長、医療人育成センター長兼入試・高大連携部門長と医学部の運営、特に後半は入学試験全般にわたり深く関与していただきました。いくつかの問題があった中で、先生がそれらを適切に処理していく過程をつぶさに拝見し、その手際の良さに大きな感銘を受けました。先生は、「今回のCOVID-19感染症もワクチンと治療薬が開発されなければ難病といえるが、ここから何かを学び取ることは将来への大きな経験になる」とされています。まさにその通りで、若手医師への期待を込めたエールとして受け止めました。

宮本教授は医療薬学の教授であり、かつ附属病院薬剤部の部長として病院運営に御貢献いただきました。特に、後半の10年間くらいは病院の院内感染防止を含む医療安全、医薬品購入費の適正化、さらには薬剤師の業務拡大と診療報酬への業務の取り込み、など、目まぐるしく変化する診療を取り巻く環境にreal timeに対応していただきました。深く感謝いたします。さらに、医学教育専任教員として、この分野の重要性を本学に定着させたのは先生を嚆矢とします。王之渙の漢詩「登鶴鵲楼」で先生の講演の結びとしていますが、講演に相応しい言葉と理解しました。

高田先生は、医療人育成センター教育研究部門の物理学教授として、あるいはこの部門の部門長として入学試験の問題作成に、また学生の教養教育に御尽力されました。本学のような医療系のみ学部からなる大学における物理学の入学試験問題作成の難しさ、物理学の教養教育としての問題点は今後も続くでしょうが、医療系大学全体の課題として考えるべきと思われます。「ノーベル賞は実力にプラスして自由な気風が加わらないと生まれず、その意味で札幌医科大学に期待する」という先生の激励を深く心に刻みました。

3人の教授の先生のこれまでの本学への御貢献に深く感謝いたします。ますますのご発展を祈念いたします。

北海道公立大学法人札幌医科大学  
学長 塚本 泰司